

☆東日本大震災ボランティア回顧(その1)☆

復旧・復興への支援活動 2012/12/25

東日本大震災から早1年10ヶ月経ちました。阪神大震災では6,000余名の尊い命を奪われましたが、復旧・復興は1年足らずで成し遂げられました。それに比べ東北大震災被害の規模は桁違いです。20,000名に及ぶ死者・行方不明者を出し、現在でも32万人もの被災者が仮設住宅や県外に避難し、過酷な避難生活を余儀なくされています。

沿岸部では地震により地盤沈下があり、インフラの復旧や住宅再建には多くの課題があります。また福島県は震災・津波被害に加え原発事故による放射能汚染問題があり、復旧・復興への道程は遥か遠いのが現状です。

神奈川県災害ボランティアネットワーク(KSVN)では遠野に無料宿泊所を開設し、多くの支援のボランティアを受け入れてきました。私もその一員として昨年7月から毎月、復旧・復興支援のボラ活動に参加しましたので、その被災地の現状の様子や活動内容の一部を紹介致します。

《岩手・宮城の被災地の様子とボラ活動》

◆被災地の状況

最初被災地に入って驚いたのは建物の瓦礫に加え、あまりにも多くの車の残骸でした。三陸海岸沿岸部では、過去に何回も津波により多くの人命が失われてきました。この経験から親が代々子供に教えられてきた言葉“津波でんでんこ”という言葉があると聞きました。これは津波が来たらとにかくすぐに高台に逃げろと。子が助かれればその家が代々続いてくという意味です。今回、避難に車を利用した為、渋滞で身動きが取れなくなり、避難場所まで行けずそのまま津波にのみ込まれ多くの方が亡くなりました。



瓦礫の撤去後(住宅建設には土盛りが必要)



陸前高田の“希望の松”



破壊された防潮堤の水門

◆ボランティア活動



朝礼後ボラ活動に出かけます



瓦礫撤去作業



打ち上げられた漁船(何れも解体・撤去)



倒壊松の回収:結局京都大文字焼きには使われませんでした。



壊滅した街



河川敷の清掃



住宅地跡の瓦礫撤去



積み上げられた瓦礫の山:引き取る県外の自治体が少なく、ただに1800万トンの瓦礫が放置されていると言われております。



砂浜の清掃:1.5m 掘り返しふるいにかけて元に戻します。海上保安庁の方々も応援に駆けつけてくれました。





現場に設けられた献花台



思い出品の泥落とし・整理



南相馬市・小高地区の様子



漁業用ロープの清掃



漁港での瓦礫処理



小高地区：昨年の3・11のまま（電気・水道は未だに不通）



ホタテの貝殻に牡蠣を種付けし牡蠣養殖筏に吊るします



廃材等は放射能があるためこの地区からは持ち出せません



夜は街全体が真っ黒です。数キロ先には浪江町への検問所



全国からの多数のボラの活動により瓦礫処理・泥だし等のハード系の作業は少なくなり、今後は仮設住宅に住む被災者の生活支援や農業・漁業支援にシフトしていくようです。またそれを受けて KSVN は遠野にあるボランティア受け入れ宿泊所は来年の3月をもってクローズされ、別の組織として今後も支援活動が継続されます。

## 《南相馬市の被災地の様子とボラ活動》

### ◆被災地の状況

福島県は岩手・宮城に比べ復旧・復興状況は全く異なっております。震災・津波の被害に加え、福島第一原発事故による放射能の問題で半径10Km以内は強制避難地域、20Km以内は避難指示が出され、現在でも16万人の被災者が仮設住宅や県外に避難させられている状況です。勿論一般の人は現在でも立ち入り禁止で復旧・復興の為にボランティアは行われておりませんでした。

浪江町に隣接する半径20Kmの南相馬市(小高地区)は、今年4月に避難指示解除準備区域となり、日中だけ立ち入り出来るようになりました。これを受け支援ボランティアセンターが立上がり復旧復興の支援活動が始まりました。

そんな訳で8月からボランティアの数が不足している南相馬市の復旧・復興の支援をするようになりました。

### ◆ボランティア活動

北海道や九州からも駆けつけるボランティアは平日で40~50、週末には60~100人ぐらいで活動しています。ただ未だ常磐線は寸断されており、南相馬に入るためには幾多の交通機関を利用しなければなりません。そんな訳で多くのボランティアはマイカーやバイクで参加します。その際、使用した高速道路料金は免除される優遇措置が適用されますが、その他の経費は全て個人負担です。

作業内容は荒れ果てた被災者宅の草刈りや生活排水溝の泥出し、家具や瓦礫の整理が主体です。またホットスポットがあり放射線量の高い場所では線量の高い樹木の枝落としなどの除染作業も行います。

朝6時起床、掃除をしてから自分の車で10数キロはなれた小高のボランティアセンターに向かい、班分け後今日の作業場所・内容や注意事項の説明を受けます。それから作業に必要な用具類を自分で軽トラに積み込み、カーナビ頼りに作業場所の現地に向かいます。作業後は用具の清掃後、作業結果報告を行います。これらは全て参加したボランティアの手で行います。まさにボランティア活動の原点“自己責任、自己完結”の原点です。

図らずも南相馬市に入った8月31日の深夜、フィリピン沖でM6.7の地震が発生。ラジオで津波の恐れがあり直ちに避難するよう放送があり、我々は直ちに近くの高台へ避難しそこで一夜を過ごすというハプニングに遭遇しました。



小高地区ボランティアセンター



宿泊所(電気・水道は不通です)



瓦礫撤去の終わった相馬市



放射線量を測っています



2日目雪が舞っていました



草刈り作業



ぽつんと残る廃屋



壊滅した松川浦漁港



荒れ果てた人家



生活排水溝の泥出し・土壌積



未だ不通の常磐線坂本駅と駅前のさびれた様子



放射線量を測った後、汚染樹木の枝落とし作業を行います。



### 《20Km 圏外の福島の様子》

福島は農林業・酪農が主産業で津波を受けなかった内陸部では農産物の栽培が始められています。しかし沿岸部は瓦礫処理が終わり荒涼とした更地になりましたが、長い間塩水に浸かった農地で農産物の栽培が出来るのは何時になるか分かりません。たとえそれが可能になっても放射能のイメージの風評でお米や野菜・果物を他県の人を買ってくれるでしょうか？ 震災被害に加え 16 万人の避難者を抱え、原発問題等多くの問題を抱える福島を、今後東電・国がどの様に復旧・復興を進めていくのでしょうか？ 復旧・復興の目は全く立っておりません。



破壊された防潮堤



瓦礫と化した相馬港

福島原発周辺 5Km 圏内は論外ですが、ここ南相馬(小高地区)では日中に限り一時帰宅出来ます。しかし県内や県外で避難生活を送る住民にとって帰宅はままならず、荒れ果てた宅地の片づけや整備はボランティアにより行われますが、その数は全く不足している状況です。今後とも微力ながら被災者の方々に代わり帰還の為の心のよりどころ、寄り添い活動を続けていきたいと思っております。

最後に福島県山元町“奇跡の中浜小学校”を紹介します。



周囲の住宅は全て流され、ポツンと残った中浜小学校

地震発生後、沿岸部のこの小学校では内陸部にある避難所の坂本中学校への避難準備をしていました。しかし津波の襲来予想時間を考えると子供達の足ではそこには行けないと判断した校長は、車で迎えにきた保護者や教職員を説得し、全員を校舎屋上に避難させる英断を下しました。その直後、屋上真下に迫る 10m を超える津波が来襲し、周囲の住宅は全て流され全壊しました。しかし屋上に避難した児童 59 名、教職員・保護者を含め 90 名全員が助かったとの事です。もし津波がもう数 10cm 高ければ・・・。

(2012 年 12 月 25 日、記・写真:上野)